〈なりたい自分への挑戦〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

今月は、ドイツのある視覚障害の青年の物語。先天性の病気のため九五%の視力を失い、健常者の五%しかモノが見えない。だが本人が見えるふりをしているために他人は全く気がつかない。障害を「ハンディキャップではなく挑戦として」受け入れ、ついに夢を叶えた実話の映画化である。

青年の名はサリー。ドイツ人の母とスリランカ人の父、そして仲良しの姉と四人暮らし。将来はドイツの一流のホテルマンになるのが夢だった。だが、ギムナジウム（中高一貫教育）の途中で突然網膜剥離により目が見えなくなる。何度かの手術で残った視力はわずか五%だけ。父は夢ではなく現実をみろと盲学校への転校を命じるが、どうしても夢をあきらめられない。母や姉の助けを得て必死の丸暗記作戦で何とか学校を卒業すると、ドイツ中のホテルに願書を送る。だが、視覚障害と正直に書いて出すと、ことごとく返却されてくる。やむなく視覚のことには触れず応募したミュンヘンの最高級のホテルから〝研修生〟として採用の通知が。

実話を基にしているだけに、サリーが周囲のサポートを得ながら、目の障害を隠してどのように格式のあるホテルでのうやうやしいサービス術を身につけていったのか。舞台裏での奮闘ぶりが、涙ぐましくもユーモラスに描かれる。見える者には当たり前なことが、見えない者にはいかに重い試練となるものか。いや、そもそもそんなにまでしてグラスを光らせるのは誰のためなのかなど、ふと考えさせられたりもする。

感じの良いハンサムガイのサリーの一生懸命な仕事ぶりには職場のほとんどの人が〝騙される〟。が、訓練のレベルが上がっていくにつれて暗記やカンの良さではごまかし切れない場面も。調理場研修ではサリーが電動スライサーでハムを切り損ねて指を怪我したのを見た料理長はサリーの視覚障害に気づくが、黙ってサリーをスライサーの分解と組み立てに立ち会わせ、ていねいに使い方を教えてくれた。研修仲間の落ちこぼれ青年は、実はホテル経営者の息子で何くれとホテルの内部構造を説明してくれる。皿洗いのアフガニスタン難民の元医師は、異分子がいじめられずに西欧社会で受け入れられるコツを体験的に教えてくれた。こうした他人の障害や弱点を〝見て見ぬふり〟をしながらさりげなく支えてくれる周囲の人たちのおかげで、サリーは夢に向かって厳しい道を着実に進んでいく。

もちろん、いい話ばかりではない。最大の難関は鬼の指導教官だ。すべての研修者に容赦なく目を光らせ「三度警告を受けたらクビだ」と脅し、壁となって立ちはだかる。サリーの虚実取り混ぜた教官との攻防戦はハラハラドキドキ。笑いもいっぱい。サリーのやる気と努力、周囲の寛容さと厳しさの見事なまでのバランスの良さ。そうか、なりたい自分をあきらめない者には、必ずどこかに救いの手があるのだ、と素直に思えてくる。背景に難民や労働問題など、新しい課題を抱えるドイツ社会の姿が垣間見えるのも興味深い。

『5パーセントの奇跡 ～嘘から始まる素敵な人生～』

ドイツ映画（111分）

監督：マルク・ローテムント

出演：コスティア・ウルマン、ヤコブ・マッチェンツ、アンナ・マリア・ミューエほか

1月13日（土）新宿ピカデリーほか全国順次ロードショー

©ZIEGLER FILM GMBH & CO. KG, SEVENPICTURES FILM GMBH, STUDIOCANAL FILM GMBH